

I - A - 17

小児不定愁訴に対する漢方治療の有用性について (起立性調節障害の短期効果を中心に)

公立陶生病院小児科 *現 大垣市民病院小児循環器科

○山口英明、馬場礼三*、大城誠、浅井俊行、笠井啓子、汲田英樹

【目的】小児、とりわけ小中学生をめぐる環境の著しい変化により、不定愁訴を訴える児は増加傾向にある。その多くはいわゆる起立性調節障害(以下、ODと略す)の範疇に入るものである。今回、我々はODに対する漢方治療の有用性を明らかにする目的で以下の検討を行った。

【対象および方法】1987年6月から1992年3月に公立陶生病院小児科を受診しODと診断され(明らかな心因反応もできる限り除外)、漢方薬もしくは西洋薬を投与され、4週間以内の効果判定が可能であった79例(漢方薬群 55例、西洋薬群 24例)を対象として、主訴の改善度を中心に評価した。漢方薬は主にツムラエキスを使用、方剤の選択は漢方的診断法にもとづいて行うよう努めた。

【結果および考案】投与2週後、4週後の有効率は漢方薬群でそれぞれ61.8%、70.9%、西洋薬群で43.5%、66.7%と漢方薬群で効果発現がより早いと思われた。さらに4週後の著効率でも漢方薬群38.2%、西洋薬群20.8%と漢方薬群が高かった。

使用方剤は28種類で、利水剤、補気剤、散寒剤、理気剤が主に投与され、苓桂朮甘湯、補中益気湯、小建中湯の使用頻度が高かった。また主訴により使用方剤に若干の偏りが見られた。

小児のODでは気虚、気滞、痰湿、寒などの病態が多く見られ、脾胃、肝との関係が深いと考えられた。

【結論】漢方的病理を考慮して使用すればODに対する漢方薬の有用性は高いと思われた。